



公益社団法人 日本柔道整復師会（日整）の会員は全国に約 17,000 人。様々な場所で技能を生かして活躍しています。その名も「日整 Man/Woman」の活躍ぶりを、紙面およびホームページで報告いたします。



氏名 中野 幸昌（なかの ゆきまさ）

所属 JICA 横浜

ひと言 大学ではモンゴル語を専攻。

留学と大使館勤務で約 6 年間モンゴルに滞在しておりました。

ビールは大好きですがアルヒ（モンゴルウオッカ）は正直苦手です。

番外編 01 . モンゴルの外傷治療に草の根から革命を起こす柔道整復術

日本柔道整復師会との出会い

こんにちは。JICA 横浜の中野と申します。このたびは社団法人設立 60 周年、誠におめでとうございます。

さて、私は 2012 年 3 月末まで JICA 地球ひろばにて草の根技術協力事業を担当しておりました。日本柔道整復師会モンゴルプロジェクトの担当をさせて頂いておりました。

私が初めて日整の皆さんとお会いしたのは、2008 年 8 月のことと記憶しております。私はもともと学生時代の専攻がモンゴル語であったことから、JICA でもモンゴル案件を担当させて頂いており、日整さんのモンゴルプロジェクトのお話を伺うこととなったわけです。

当初は、「骨接ぎのモンゴル普及?そんなことできるかな?」と思っておりましたが、亀山実先生をはじめとする日整の皆さんの熱い、熱い説明に、「これは行けるかもしれない」とあっけなく考えが変わったことを記憶しています。

とはいうものの、JICA の資格審査は厄介、そして求める事業提案書は難解で、審査に時間もかかるため、皆さんには心苦しく思いながらも数多くの無理難題を課してきました。それに対して、いやな思いもされたことと思いますが、それでも嫌な顔一つせず真摯に対応されてきたこと、本当に頭が下がる思いです。

そんな中、いつでも真摯な対応をして頂くことで、私の中にも、「きっといいプロジェクトができるに違いない」という確信めいたものも徐々に芽生えてきたことも事実です。

草の根技術協力事業のスタート!

そして初めてお会いしてから 1 年 1 か月後、2009 年 10 月 1 日に JICA 草の根技術協力事業(草の根協力支援型)としてプロジェクトがスタートしました。その後も、新型インフルエンザの影響による活動の延期、亀山先生の急逝など、思いがけないことが続きましたが、日整さんとモンゴル

健康科学大学の強い絆により、これらの危機を見事に乗り越えられました。

その成果を踏まえ、2011年9月には厳しい審査を経て草の根パートナー型のプロジェクトがスタート。厳しい審査を経て採択内定となった際、「祝勝会」と称して、今はなき広尾のJICA地球ひろばの「カフェ・フロンティア」で本間先生、根来先生らと生ビール(1杯あたり40円が義援金として寄付される「義援金ビール」)を33杯飲み干し、カフェ新記録を樹立したことは忘れられない思い出です。

モンゴルでの目覚ましい成果の秘密?

私は2回現地を視察させて頂きました。1回目は2010年9月、ウランバートルで大学班の指導、2回目は2011年9月、モンゴルの西の端、バヤンウルギー県での地方班の指導でした。



写真1. モンゴル国立健康科学大学での調査



写真2. バヤンウルギー県知事と地方班指導者一同

視察を通して強く感じたことは、日整さんと健康科学大学とのチームワークの良さです。一つのチームとして、モンゴルでの柔道整復術の普及という大きな目的に向かって進んでいることに感銘を受けました。

日整さんの現地活動は単に柔道整復術の指導にとどまりません。達成度を見るために試験を作り、採点し、関係者との協議を行い、寝る間もない毎日と聞いています。また地方班の皆さんは「移動」という楽しくも?つらい修業が待っています。

そんな中でもトクトイ(乾杯)という名の飲みニケーションも欠かさず、チームとしての良い雰囲気秘密がここにあるのかなとも思いました。



写真3. フブスグル県にて(写真提供:国際部)

約3年半、担当をさせて頂き、自分自身も大変勉強をさせて頂きました。私の大好きなモンゴルで、柔道整復術の普及により外傷の正しい処置が迅速に行われ、モンゴル人の健康が増進されることを期待するとともに、他の国々にもこの素晴らしい技術が広がっていくことを楽しみにしております。